

松崎町池代方言における準体助詞と準体法

著者名(日)	木川 行央
雑誌名	言語科学研究 : 神田外語大学大学院紀要
巻	16
ページ	55-73
発行年	2010-03
URL	http://id.nii.ac.jp/1092/00000953/

松崎町池代方言における準体助詞と準体法

木川 行央

要旨

静岡県賀茂郡松崎町方言においては、共通語の準体助詞「の」にあたる形式にガがあり、また活用語の準体法も用いられる。本稿では、自然談話資料を用いることにより、これらの表現の用いられ方、およびその相違点について考察した。その結果、ガは共通語の「の」より、名詞「こと・もの」に近い意味・用法をもつ形式であること、その結果としてガが活用語に後接する場合と準体法は、連体用法の場合は同一名詞準体と同格準体の違いとして現れることを示した。さらに、これ以外の用法についても、この点によって説明されることが多いことを示した。

キーワード：松崎方言、自然談話、準体助詞、準体法、同一名詞準体、同格準体

1. はじめに

静岡県賀茂郡松崎町池代方言において共通語の準体助詞にあたる形式にガがあり、そのほかに動詞・形容詞の終止連体形のいわゆる準体法も用いられることは、木川1988において報告した。この報告は、1979年から1981年にかけて実施された文化庁「各地方言収集緊急調査」によって当地で収集された自然談話の文字化資料から該当形式をとりだして分析したものである。ただし、そこで用いたのは、全文字化資料のうち約3時間分で、かつガを中心に見たものである。しかし、実際に文字化された資料は約8時間分ある。今回は前回対象としなかった部分も含めた全文字化資料の結果を用い、ガ以外の形式および準体法をも含めた姿を示すことを目的とする。

2. 資料

まず、今回の資料の概略を示す。表1が、今回使用する談話の話者一覧である。職業などは、調査時点のものである。話者の生年が50年程度離れているが、主となる年齢は、調査時点で60～70歳代である。

場面、談話の話題および時間数、それぞれの談話に参加している話者は表2の通りである。場面は調査に際して全国で統一的に設定されており、結果的に男性話者が多い。また、話者のうち、3年間通じて参加、かつ多くの談話で話の中心であったM4のデータが最も多い。そのため、M4に個人的な使用の偏りがあれば、それが結果に影響を与えている可能性もある。このように、当方言の資料としては、性別や年齢に偏りがあるが、性差や年齢差、個人差が考えられる場合を除き、合わせて対象とする。

今回分析の対象とするのは、共通語訳として準体助詞「の」が用いられるすべての表現である。共通語訳において準体助詞の「の」の後に助詞が来る例、および活用語に「の」が後接する例を抽出し分析の対象とした⁽¹⁾。

表1 話者一覧

話者記号	性別	生年	外住歴	職業
M1	男	1901	なし	農業
M2	男	1901	なし	農業
M3	男	1908	なし	農業
M4	男	1908	なし	農業
M5	男	1908	なし	農業
M6	男	1919	軍歴4年8ヶ月	農業・町会議員
M7	男	1926	なし	農林業
M8	男	1952	15-18沼津、20-21浜北市、21-22旧湯ヶ島町	農林業
F1	女	1912	なし	農業
F2	女	1912	なし	農業
F3	女	1913	なし	農業
F4	女	1915	なし	農業
F5	女	1933	なし	民宿業・農業

表2 談話の調査年度・場面・話題・話者

調査年度	場面	話題	話者	録音時間
1979年	老年層の男性の会話	わさびの話・炭焼きの話	M2・M3・M4	63分
	老年層の男女の会話	大水の話・猟の話	M2・M4・F2	40分
		道路の話・仕事の手順・水の話	M3・M4・F2	69分
		結婚式の話	M2・M3・M4・F2	13分
1980年	目上の者と目下の者の会話	小学校の思い出	M4・M6・M7	43分
		婚礼の話・家のつくり・炭焼き	M4・M6	78分
	老年層の女性の会話	蚕飼いの話・年中行事について	F3・F4・F5	50分
		万歳と物売りについての思い出	F3・F4・F5	16分
1981年	場面設定		M4・M5・M6・M7・F1・F3・F5	37分
	民話		M1・M2・M4・M5・M7・F1・F3	43分
	老年層と若年層との会話	猪狩りの話・柿の剪定	M4・M8	56分

3. 活用語以外に後接する場合

本稿で扱うのは、共通語において準体助詞とされる「の」が用いられる場合の表現である。共通語の助詞「の」には、格助詞としての用法以外に、活用語以外の語に後接し「のもの」のような意味を表す用法、活用語の終止連体形に後接してその前の部分を体言化する用法、活用語の終止連体形に後接しさらに「だ・です」が後接する用法、終助詞が後接したりあるいは何も後接せずそれで終止する用法がある。どこまでが準体助詞の用法なのかについては議論もあるが、本稿では典型的な格助詞としての用法以外の用法を対象とし、活用語以外に後接する場合と、形容動詞型活用の助動詞以外⁽²⁾の活用語に後接する場合に分けてまとめる。さらに活用語に後接する場合については、共通語で準体助詞の「の」を介さない用法がない場合を中心に考察する。

表3 名詞に後接する準体助詞

後接形式	ノ	ン	ノガ	ンガ	ガ	ンノ	
格助詞ガ	1		4	3			8
格助詞オ	1		1	2			4
格助詞ト			1		1		2
格助詞ニ				5			5
格助詞ノ			2	2	1		5
格助詞エ				2			2
格助詞デ			1				1
格助詞ヨリ			1				1
係助詞ワ	5	1	6	3			15
副助詞ナンカ			1	2			3
副助詞モ				3	2		5
副助詞デモ				1			1
無助詞	1		12	21	1	1	36
助動詞ダ			5	2			7
終助詞カ				1			1
計	8	1	34	47	5	1	96

表3は、共通語で準体助詞「の」が用いられる部分に現れる形式を、後ろに来る助詞・助動詞ごとにまとめたものである。後接形式のうち無助詞は、準体助詞の後に助詞がないことを表す。それぞれの例は、格助詞ガ・オないし係助詞ワが現れていないと考えることができるが、いずれの助詞相当であるかを判断することが困難な場合もあるので、ここでは、まとめて示す。また、格助詞ノにはンを、助動詞ダにはその活用形やダケンドを含む。

さて、名詞に後接する形式としてはンガとノガの2形が最も多く用いられる。以下にンガ、ノガ、そしてノ・ガが用いられた例をあげる。

- (1) ユワーナエ ハエーツテ フユゴモリンガオ トッタッテ。[岩穴へ入って冬ごもりのを捕ったって：F 4⁽³⁾]
- (2) フタリノ バーエジャー ムカシンガン ホーガ エーツツーコトン ナルカナー [二人の場合では昔の方が良いということになるのかなあ：M 4]

- (3) サンジューサンネンノガガ ガッコエサ キネンニ イマデモ アルツツハナシダケンドサー。[33年のが学校へさ、記念に今でもあるという話だけどさ：M4]
- (4) カシノヒーナサンガ アツテナー イロノキレーノガガ ソレオ トー グライカッテキテ ナラベタリサー [菓子のお雛さんがあってなあ、色のきれいなのが、それを十位買ってきて並べたりさあ：F4]
- (5) Kサンノワ コトシノコダカラ ダメダジャー [Kさんのは今年の子だから駄目じゃない：M8]
- (6) オラガモ ジブンデ カリテ ヒラエータトコモ アリ カッタ トコモアルダ。[俺のも自分で借りて開いたところもあり、買ったところもあるんだ：M4]

最も多く現れる2形のうちンガは、ノガのノが撥音化したものと考えられるが、ンガとノガの使用における違いとしては、音環境の違いを挙げることができる。すなわち、最終拍が撥音の名詞の場合、ンガを用いると撥音の連続が生じ、これを避けるため、ノガが用いられる。上の例の他、「熱心、去年、女工さん」などの語にノガが後接する例が見られた。本資料において、撥音で終わる名詞でノガが後接しない例としては、「カンタンガモ」[簡単なもの：M6]があった。この場合、名詞にガが後接したとも考えられる。しかし、後述のように、ガが名詞に後接する例は限られている。従って、ンガが後接し、ンの連続が生じたので、一音脱落したと考える方が妥当であろう。ただし、今回の集計では、表面的な形式によって集計したので、これも「ガ」に含めた。なお、これ以外に同様の例はない。

ンガとノガの違いとして、音環境以外に、性差がある可能性もある。男性がノガ23例・ンガ41例であるのに対し、女性はノガ11例・ンガ7例で、男性の方がンガの使用率が高い。ただし、発話量が最も多い男性話者M4がノガ16例・ンガ33例とンガの使用率が高いためである可能性もある。M4をのぞくとノガ7例・ンガ8例となり、男女差は確認できない。

ンガとノガ以外の形式としてはノ・ン・ガ・ンノがあるが、その出現頻度は非常に少ない。ノとンは共通語ないし東京語でも使う形式であるが、当方言で

はあまり用いられない。またノは男性の使用例しかなかった。撥音であるか否かという点は上記のノガとンガと同じであるが、ノは男性にのみ見られ、性差についての結果は反対である。さらに、場面や話題による影響が考えられるが、いずれにしても確認できるだけの用例数がない。ガは上記の「簡単」に後接する例以外はオラ（俺）に後接する例のみ（4例）である。ただし、オラに後接するのはガに限定されるわけではなく、数量的にはンガの方が6例と多い。また、この表現を使用している話者も限定される（M4が3例、M2が1例）ため詳細は不明である。

次に連体詞（こんな・そんな・あんな・変な）に後接する準体助詞であるが、表4のようにガが多く、かつ助詞が後接しない例がほとんどである。

表4 連体詞に後接する準体助詞

	ン	ガ	計
無 助 詞	2	15	17
副助詞デモ		2	2
助 動 詞 ダ		3	3
計	2	20	22

実際の例を以下に挙げる。

- (7) アレア ニジューンナッテ ヘンナガダッタヨ [あれは二重になって変なのだったよ：M4]
- (8) アンガエ ソンナガー エライジャーナイデスカ イマー [案外そんなのが多いのではないですか：M6]
- (9) マンダエモ キタナー アンナン クルト タノシミデナー [万歳も来たなあ、あんなのが来ると楽しみでなあ：F3]

この表現と名詞に後接するンガ・ノガをあわせて考えると、名詞に後接するンガ・ノガは、全体で「のもの」の意味を担うのではなく、連体格を示す格助詞ン・ノと「もの・こと」をあらわすガに分割して見るべきであろう。すなわち、ガは名詞「もの・こと」に近い意味・用法を持つと考えるのである（もち

ろん、名詞そのものではない)。ガをこのように捉えると、活用語に後接する場合の用法についても説明ができる点が多い。

この他に名詞等が述語となるダ型文があるが、これについては次節で述べる。

4. 活用語に後接する場合

共通語で活用語の後に準体助詞がつく例には、準体助詞を介さなければならぬ例と、(意味の異なりの有無を問わなければ) 介する場合・介さない場合の両方がある例がある。柳田(1993:12-13)は、準体助詞が活用語に後接する用法を以下のようにまとめ、このうち、常に準体助詞を介するのは<1>①②と<2>①、そして「だろう」などを除いた<3>①であるとしている。

<1>連用格(主語を含む)に立つ例

①格助詞が明示されている例

表5 活用語に後接する準体助詞

	0	ノ	ン	ガ	ノガ	計
格助詞 ガ	15	8		31		54
格助詞 オ	5	5		11		21
格助詞 ッテ		1		2		3
格助詞 ト	7	1		4		12
格助詞 ニ	43	1		14		58
格助詞 デ	1			1		2
格助詞 エ				1		1
格助詞 ノ				1		1
格助詞 ヨリ				1		1
係助詞 ワ	40	27		22		89
副助詞 モ	6	3		13		22
接続助詞 ニ	13					13
接続助詞 デ	13	3	3	54	1	74
無助詞	5	4	1	66		76
助詞合計	147	53	4	220	1	427
助動詞 ダ	773		22	90		885
助動詞 デス	28		2	7		37
助動詞合計	801	0	24	97	0	922
計	948	53	28	317	1	1349

②係助詞が続き、格助詞が存しない例

<2>接続部に立つ例

①格助詞「ニ」「デ」がついて、接続助詞となっている例

②接続助詞「ナラ」がついた例

<3>述部に立つ例

①助動詞「デアル」「ジャ」「ダ」「デス」が付く例

②終助詞「カ」「ネ」「ヨ」「サ」がつく例

③終助詞がつかない例

まず、この分類ををもちに、共通語で常に準体助詞を介して用いられる場合について、後で別にまとめるダ型文を除いた結果を表5に示す。なお、表中の0は活用語が直接接続すること、すなわち準体法であることを表す。また、柳田(1993)で格助詞とされているニとデは、いずれも接続助詞と格助詞に分けてある⁽⁴⁾。さらに、助動詞ダにはダカラ・ダケド等の他、ダの活用形を含むが、共通語で準体助詞を介する言い方もあるダローは除いてある。

さて、表5でわかるように、活用語に助詞が後接する場合にはガを介することが多い。ただし、助詞による違いがあり、格助詞ニや係助詞ワ、接続助詞ニはガではなく準体助詞を介さない形の方が多い。以下に用例を示す。

- (10) テーキジドーシャガサ シモダテーキツツーガガサ イチンチニ サンカエーカ ヨンカエーシカ トマレナエートキダ。[定期自動車がさ、下田定期というのがさ、一日にまあ三回か四回しか止まらない時だ：M4]
- (11) アマッテルガワ モッテキエル。[余っているのは持ってこられる：F2]
- (12) ジブツーオキバツツーノオ ダイクサンコシラエテモラッタデスヨ [持仏置き場というのを大工さんにこしらえてもらったんですよ：M6]
- (13) イマー イルノワ ヒガシノホーバッカイダナー [＜鹿が＞今居るのは東の方ばかりだなあ：M4]
- (14) ココジャー リョーリバンテユーオ タノンデサー ソノヒトノコンダテノアレオ ジュンビオ シルガダカラ [ここでは料理番というのを頼

んでさあ、その人の献立のあれを、準備をするのだから：M4]

- (15) ジテンシャデ キターツツワ ハエマー ソーユワ ホントーノ
ムカシデ [自転車で来たというのは、もうまあ、そういうのは本当の昔で：
F3]

さて、ガを介する場合と準体法の意味の違いについては、同一名詞準体と同格準体⁽⁵⁾の違いが考えられる。話し言葉であることもあり、いずれであるかの確定が難しい例も多く、実数を示すことはできないが、割合としては、ガを介する場合に同一名詞準体、準体助詞を介さない場合は同格準体が多い。

- (16) ギンザノマチー アルクト シトガ ゾロゾロ アルクガガナー エ
ラクテサー [銀座の町を歩くと人がぞろぞろ歩くのがなあ、多くてさあ：
M4]

- (17) イマー ハチョー アーセルーガー モッテルシューモアルダ。[今波
長を合わせるのを持っている衆もあるんだ：M4]

- (18) キタドー シモダカラ ウリー トラックデ ウリークルガ [来たよ、
下田から売りにトラックで売りに来るのが：F3]

- (19) チェンソーガ アルカラ キルワ ラクンダケンナー [チェーンソー
があるから切るのは楽だけどな：M6]

- (20) ムカシワ ヒロゲルワー ヒロゲテモ セバメルシトワ ナカッタ
ナー [昔は(わさび田を)広げるのは広げても、狭める人はなかったなあ：
M2]

- (21) サカオ イマ ミガラデ イクニサー オモテー イッテ ヒトヤス
ミシテイキツガナキャー ウチート ハイッテイケナイデスヨ [坂を今手
ぶらで行くのにさあ、庭に行つて息継ぎしなければ家に入つていけないで
すよ：F2]

この結果は日本語史において、同一名詞準体から先に準体助詞「の」が活用語に後接するようになったとされる経緯(原口1978、金水1995、青木2005等)と、ガと「の」違いはあるが、一致する。また、同一名詞準体が実際の事物を

指し示すという点で、上述のガが名詞「もの・こと」に近いという点とも符合する。さらに、格助詞のニや係助詞ワの前にはガより、準体法が多いというのも、これらの助詞の前では同格準体が多いことによると考えられる。

また、ガが格助詞ニに前接する場合、その後に来る動詞はナルやスルが来ることが多い。共通語では「ひどいのになると」のような「<形容詞>のになると」以外は、「の」は不自然であるが、当方言においては、(22)のように共通語訳する時、ガを「こと」とするのが適切な例がある。

- (22) テレビノオキバー コマッタワケデスヨ サテ ツーガン ナツテネ
ドーシテモソノ ジブツガ オイテアルトコエ オキタイトユーガニ
ナツチャウ [テレビの置き場が困ったわけですよ、さてということになっ
てね、どうしても、その、持仏が置いてある所へ置きたいと言うことになっ
てしまう：M6]

これも、上に述べたように、ガを「こと・もの」に相当する形式と考えれば、了解できる用法と言えよう。

共通語の「ので」という接続助詞は、準体助詞の「の」に「で」(表5では接続助詞としている)、同じく「のに」は準体助詞「の」に「に」(表5では接続助詞としている)が接続したものとされる。当方言で「ので」に該当する言い方には、準体助詞の種類に応じて、以下の形がある。

- (23) タェーガェー コレワ クマダローツテユーガデ オイシャサンニ
テアテー シテモラタツテサー。[大概これは熊だろうというのでお医者
さんに手当てして貰ったってさ：M4]
- (24) ヒトモシ モシテ ソーシテ カエエツテクルト コレガ ヨルン
ナルデサー [一燃し燃して、そして帰ってくると、これが夜になるのでさ
あ：M4]
- (25) モクロクオ オシラベイタシマスノデ シバラク オユーヨオ オネ
ガイイタシマス [目録をお調べいたしますので、しばらくお猶予をお願い
いたします：M6]

(26) ソーユーノー オモーンデサー [そういうのを思うのでさあ：M4]

この中では、表5にあるように、ガデが最も多く、ガ等を介さないデがそれに次ぐ。この2形のうち、ガデは55例のうち、前に「という」⁽⁶⁾が来るのが46例と8割以上をしめるのに対し、ガ等を介さないデの場合13例のうち「という」が前接するのは4例と、このような偏りが無い。「(という)ガデ」は共通語の「～ということで」に相当するとも考えられるが、必ずしもすべてがそうなるわけではなく、詳細については改めて考察したい。

ノデ・ンデについては数も少なく、話者などの傾向も言えない。ただ、ノデは本資料において用いられた3例すべてが、マス・マセンという丁寧を表す助動詞に後接する。マス・マセンという敬語形式の使用が共通語的なノデの使用を導いたものとも考えられる。なお、共通語の「だから」にあたる表現としては、表5には入れていないがンテがある(38例)。

(27) イクラデモ ノンデモエーケンド オチャガ デテイルンテ オチャ
ヤラッシャエーナンテイッタケンド [いくらでも飲んでも良いけれどお茶
が出ているので、お茶をおやりなさいなんて言ってたけど：M4]

(28) シッテルモノドーシデ イクガダカラ ワリアエ ラクダト オモエ
マスンテサー ソーマー シンパエ ナエト オモエマスカラー [知っ
ているもの同士で行くのだから割合楽だと思しますのでさあ、そうまあ心
配ないと思いますから：M6]

これに対し、共通語の「のに」に該当する言い方は準体助詞を介さない形のみである。

(29) ヤダヨー マー オーバーニ ニテールッテ ユツテクレリヤー エーニ
[嫌だよ、まあ、お婆さんに似ているって言ってくれれば良いのに：F3]

助動詞ダ・デスが後接する場合⁽⁷⁾は、活用語が直接前接する表現が9割近くを占める。この他に、ガ・ンを介する例がある。以下に例を挙げる。

- (30) ホカノモンノ ソーバノ ヘンドートア ヘンドーガ チガウダ。[他の物の相場の変動とは変動が違うのだ：M 4]
- (31) アノシューノ イヌデ ヤルダッテ。[あの衆の犬でやるんだって：M 4]
- (32) カナーナイデスヨ ゼッタイ チガーデスヨ [適わないですよ、絶対違うのですよ：M 6]
- (33) ホンシャガ ナゴヤダカラ ナゴヤノ ホンシャエ モツテクガダ [本社が名古屋だから名古屋の本社へ持っていくのだ：F 3]
- (34) イマ ユー チマキツツーガダヨ [今言うチマキというのだよ：F 3]
- (35) ホントワ コマルガデスヨ マチワ。[本当は困るのですよ、町は：M 6]
- (36) ムカシノ アレオ カクチョーシタトコガ ダエーブ アルンダ。[昔のあれを拡張した所が大分あるのだ：M 2]
- (37) ヘー ズイブン ターツカクナツタンダナー イマー [へえ、随分高くなったのだなあ：M 5]
- (38) コンドー ムスメガ ヨメニ イクンダッテ [今度あ、娘が嫁に行くのだって：F 3]

ガと準体法の違いとしては、野田 (1997) のいう「スコープの『の (だ)』」と「ムードの『のだ』」の違いなどが可能性として考えられる。「スコープの『の (だ)』を用いた文は、準体助詞によって名詞化された部分や連体修飾節との共通性をもっている」(野田1997:26)ということもあり、名詞「もの・こと」に近いガが先ず用いられるのは、スコープの「の (だ)」であることが予測される。しかし、両者の区別は困難であり、今回資料とした談話において数量的にその実際を示すことはできない。ただ、当地において実施した質問法による調査でも、全体的には、ムードの「のだ」ではガがあまり用いられず、スコープの「のだ」にガが用いられる傾向が認められる(木川2006)。

次にダ型文について見ておく。今回は、表には示していないが、「アンゼンダダヨナー」[安全(なん)だよなあ：M7]、「アエダダ」[あれ(なん)だ：F4]のようにダの連続する言い方が現れる(15例)。馬瀬(2003)は、長野県松本市方言の「ソーダダ」を「そうなんだ」と訳し、ダの連続を、共通語の

「なのだ」に該当するもので、「元来、西関東地方の方言の特徴の一つに数えられるもの」とする（馬瀬2003:28）。本資料の例を下にあげる。

- (39) コドモニャー ヨシ オマエラ イッテ アソコデ アソベツツナコト
ト コーユートコガ ヒツヨーダダヨ。[子供には、よしお前ら行ってあ
そこで遊べと言うようなこと、こういう所が必要（なん）だよ：M6]
- (40) ハメー ダメンシタ ナニーシタダ セーネンガヤルダカラナー ハ
ヤ オトナダダ イマニ オトーサンダダ。[羽目板駄目にした、何した
んだ（と言っても）、青年がやるんだからなあ、もう大人（なん）だ、今
にお父さん（なん）だ：M4]

このダの連続については、前のダを助動詞ダの連体形、後のダを助動詞ダの終止形と解釈することができるであろう。助動詞ダの連体形の準体法によって、ダの連続が生じているということである。ただし、動詞などの活用語の場合、たとえば共通語の「行くのだ」に該当する表現として、イクダとイクガダの二つの表現があるのに対し、ダ型文の場合にはダの連続した表現しかなく、ヒツヨーダガダのような表現は、今回の資料にはない。本方言における助動詞ダの連体形としては、(41)・(42)のように共通語と同じくナが用いられるが、それと同時に、(42)と同様な表現として、共通語も同様であるが、(43)のような例もある。従って、ダの連体形としてダを認めることは可能であると考え

- (41) イチバンワルイシヨーバイナワケダ #アレルヒトニワサ# [一番悪い商売なわけだ荒れる人にはさ：M6]
- (42) ナカナカ ソノ サトク トンチニ イーヒトナモンダカラ ヤマン
ナカエハエツタッテ。[なかなか賢くとんちによい人なものだから山の中へ入ったって。：F2]
- (43) ココエエ タッテ ウゴクナヨッテサー タタシトエエタラ ソノヒト
トガワカイヒトダモンダカラ ハエー タッテイキレナクナッテ ホカノ
ホーエトウゴイタッテサー [ここに立って動くなよってさあ、立たせてお

いたらその人が若い人なものだから]

さて、表5に示したのは共通語において「の」を介さないと文法的でない場合であった。これ以外に、意味の違いの有無は別として、共通語で「の」を介する言い方と介さない言い方の両形がある場合がある。この用法については、以下に概略を述べておきたい。

まず、共通語の「なら」に該当するダラ⁽⁸⁾であるが、3例あるうち、2例がガダラ、1例が動詞に直接後接する言い方である。この違いを、共通語の「なら」と「のなら」の違いと並行的に考えることができようが、これだけの資料からは明言できない。

(44) ナンデモ カキダラ ナルガダラ エーラナー。(何でも柿ならなるのなら良いだろうなあ：M8)

(45) イシー カズクダトカサー カカエルダトカッテ ユーダラ ナンニヒトニモ メーワク カケナイシサー [石を担ぐだとかさあ、抱えるだとか言うなら、何、人にも迷惑かけないしさあ：M4]

当方言において推量を表す形式にはラとズラがある。この2形式について、同じ形式のある焼津方言では、活用語にズラが接続する場合、共通語の「のだろう」に当たる意味となる(中田2002:28)。従って、ラ・ズラの前に準体助詞が来る事はないと予測される。当方言においても、基本的にはこれと同様であると推測されるが、ズラの前にガ・ン(ガズラ5例、ンズラ1例)が来る例がある。

(46) オームカシ ヤッタガズラ [大昔やったのだろう：F4]

この言い方は6例現れるが、そのうち4例が話者F4によるもので、話者による偏りが考えられる。また、最も若い話者であるM8は、ズラではなくダラを用いている。ダラもズラと同様の接続・用法と考えられるが、この話者の発話の中にはダラの前にガを前接する例が2例ある⁽⁹⁾。

- (47) アーユーガ コート オトイテ エーガダラ。[ああいうのは、こう落として良いのだろう：M8]

推量を表すダラは、M8だけではなく、M4等も使用しているが、ガヤンを介した例はない。ただし、ガヤンを介さないダラの例の中には共通語に訳した時、「のだろう」ではなく、「だろう」で訳す方が妥当に見える例もある。ズラ、さらには最近用いられるダラの意味が、従来のズラの意味から変化してきている可能性もある。

同じく推量を表し、表5からは除いたダローであるが、この前に準体助詞が来る例としてはガダローが1例見られた。

- (48) ドーユーガダロー。[どういふのだろう：M4]

このほかに、推量を表す形式にローがある。この形式の場合、共通語の「のだろう」に該当する用法でも、準体助詞を介さない。

- (49) ミンナ ソーユーヨ ナゼ ツクンナエーロー イケシロジャーツテ。
[みんなそう言うよ、なぜ作らないんだろうって：M3]

ちなみに、このローは過去を表すタに後接して、タローとなる。過去の推量を表す形式としては、ラ・ズラの系統のツラがあるが、使用例はツラよりもタローの方が多い。当方言において推量を表す形式としては、(48)のようなダローの使用も多いが、これはこのローの存在との関係が考えられる。この他に、ベーも用いられ、推量を表す形式の意味の差、あるいは共通語の「だろう」と「のだろう」に該当する表現については、複雑な問題がある。これについては稿を改めて考えたい。

推定の助動詞ラシーにも準体助詞を介する場合と、動詞が直接接続する場合がある。ただし、ラシー57例のうち、準体助詞を介するのは2例のみであった。

- (50) アノオジーサンガ ススメテ ココエエ ミチ イレルヨーンナツタ

ガラシーデ。[あのおじいさんが進めてここへ道を入れるようになったのらしいので：M4]

ガが活用語に後接する場合の用法としては、以上の他に、文末に現れる用法があり、かつ後ろに終助詞などが来ない場合と、終助詞が接続する場合がある。以下に、準体助詞が現れる例のみをあげる。

- (51) カタイ マユオ ツクルマデワ イクンチグライン ナルガ ソースルト [固い繭を作るまでは幾日位になるの、そうすると：F5]
(52) ホソイ イジケタヨーナエダ オトイテ エーガカナ ミンナ。[細いじけたような枝は落として良いのかな：M8]

終助詞あるいは副助詞カ・カモが後接する場合、ダカ・ダカモという表現が現れる。

- (53) マタ ヒトツ トシー モラウダカナ [また一つ、としをとるのかなあ：M5]
(54) ナンノショーバイデモ オンナシコンダカモ シンナイケドモ [何の商売でも同じ事なのかもしれないけれども：M6]
(55) アメニ アッタアトダカ アメニ アワナエーアトダカッテ ユーコトガハッキリワカルダ。[雨にあった後なのか、雨にあわない後なのかということがはっきり分かるんだ：M4]

これも、前述のダの連続と同様、ダカのダは助動詞ダの連体形と考えて良からう。

最後に、その他の終助詞がガに後接する例をあげる。

- (56) キサマー ミレー コノムコーノ ユワオツツーガサ。[貴様、見ろ、この向こうの岩をというのさ：M2]
(57) ワサビツクルニャー アラーコトガ イットー ホネガ オレルノサ。

[山葵を作るには洗う事が一等骨が折れるのさ：M 4]

(58) ジョーズー カコツタンサ コー キリー フイテ ヒナエエヨーニ
ナ [上手に囲ったのさ、こう霧を吹いて乾燥しないようにな：F 3]

(59) アジロエエ ニマイニシルダ サンマイニシルダト ワケテ ヤツタ
ガージャ [網代へ二枚にするんだ三枚にするんだと分けてやっていたの
じゃない：F 4]

以上のうち、準体助詞にジャが後接するのは上の1例のみである。また、終助詞カが後接する場合（カナ・カイ・カネを含む）とサ（サネを含む）が後接する場合は、いずれもガよりノ・ンの方が多く用いられる（カが後接する場合、ガ1例、ノ4例、ン6例。サが後接する場合、ガ19例、ノ10例、ン47例）。カが後接する場合については、ノ・ンもあまり多くはない。上記のダカの使用例の多さが影響しているのであろう。サについては、使用され始めた時期の影響などが可能性として考えられるが、詳細は不明である。

5. おわりに

以上、松崎町池代方言における準体助詞および共通語で準体助詞が用いられる表現について、その用法および実例を見てきた。その結果、本方言のガは共通語の準体助詞「の」よりも名詞「もの・こと」に近く、それが準体法との用法上の差として現れていると見ることができるところを示した。この状況は、おそらく準体法のみであったところへ、体言化する形式としてガが用いられるようになった結果と見ることができるとは思われる。しかし、準体助詞を介さない言い方と介する言い方の意味の差などについては、まだ明確に出来ない部分が多くある。さらに、関連する問題として、推量表現など他の表現も問題となってくる。当方言も、他の地域の方言と同様、共通語化・東京語化が急激に進行している。談話資料とともに、質問法調査などを合わせさらに詳しく記述しておく必要がある。

また、準体助詞のガは当方言の他にも北陸や高知などで使用されている。方言間での意味・用法の差、およびこのような分布を形成した経緯、さらには他の方言で用いられる準体助詞の意味・用法の詳細な記述など今後考察すべき課

題は多い。

なお、本研究は平成21～23年度科学研究費補助金（基盤研究（c））「首都圏方言の実態に関する基礎的研究」によるものである。

注

- 1 準体助詞を用いた共通語訳が適切か否かの検討が必要であるが、今回の分析においては原資料の共通語訳および筆者による共通語訳の再検討の結果をもととする。
- 2 当方言では、いわゆる形容動詞が連体修飾する場合ナではなくノもつくので、ここでは共通語における形容動詞および形容動詞型の活用をする「ようだ・みたいだ」もここに含める。また、以下で「名詞」という場合、これらの語も含む。ただし、連体修飾する場合、常にノであるわけではなく、ナが接続する場合もある。また、当方言において、それぞれの助詞が格助詞・係助詞などと認定できるか、という問題があるが、本稿においては、共通語の該当する助詞に準じて扱う。
- 3 [] 内には、共通語訳と表1に示した話者記号を記す。なお、原資料には他の話者の発言やフィラーが入っている場合があるが、それらは削除してある。
- 4 デの中に、デモッテも含む。
- 5 石垣（1955）にいう「形状性名詞句」と「作用性名詞句」、原口（1978）にいう「受け型」と「括り型」などに該当する分類である。
- 6 実際の発話では、ツーやその短縮形ツなどのバリエーションがあるが、これらをすべて含む。
- 7 ダ・デスで終止する場合の外、それぞれの活用形、終助詞のついた形、さらにダカラ、ダケド（ダケンド・ダケン・ダケンドモ等）・ダデ等さらに、名詞の集計では除いたダダもこの集計には入れてある。
- 8 このダラをダの活用形と見ることもできるが、柳田（1993）の分類に合わせ、接続助詞とする。
- 9 M8の発話で用言の後に推量のダラが来る例は3例で、1例は準体助詞を介していない。

参考文献

青木博史（2005）「複文における名詞節の歴史」『日本語の研究』1-3、47-58、日本語学会

- 石垣謙二（1955）『助詞の歴史的研究』、岩波書店
- 江端義夫（1978）「『が』準体助詞の遺存分布考—主として中部地方域方言について—」『国文学攷』79、25-37、広島大学国語国文学会
- 大野早百合（1983）「現代方言における連体格助詞と準体助詞」『日本学報』2、27-66、大阪大学大学院文学研究科日本学研究室
- 大野早百合（1984）「現代日本語における種々の準体助詞の成立について—現代方言における連体格助詞と準体助詞<その2>」『日本学報』3、63-84、大阪大学大学院文学研究科日本学研究室
- 木川行央（1988）「伊豆松崎方言自然談話資料に現われる準体助詞」『論集ことば』、57-72、東京都立大学人文学部国文研究室
- 木川行央（2006）『静岡県下「言語の島」における言語変容に関する基礎的研究』平成15年～平成17年度科学研究費補助金基盤研究（C）「静岡県下「言語の島」における言語変容に関する基礎的研究」成果報告書
- 金水敏（1995）「日本語史から見た助詞」『月刊言語』24-11、78-84、大修館書店
- 中田敏夫（2002）「県内各地の方言」平山輝男他編『日本のことばシリーズ 22 静岡県の方言』明治書院
- 野田春美（1997）『の（だ）の機能』、くろしお出版
- 原口裕（1978）「連体形準体法の実態—近世後期資料の場合—」『春日和男教授退官記念語文論叢』、431-450、桜楓社
- 馬瀬良雄（2003）『信州のことば 21世紀への文化遺産』、信濃毎日新聞社
- 柳田征司（1993）「無名詞体言句から準体助詞体言句（「白く咲けるを」から「白く咲いているのを」）への変化」『愛媛大学教育学部紀要 第2部 人文・社会科学』25-2、11-36、愛媛大学教育学部